

障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について

—— 障害者への関心度、友人関係、援助行動、ボランティア活動を中心に ——

河 内 清 彦*

本研究では、障害者等との自主的な接触を障害者についての関心度と友人関係、及び障害者などへの助力的援助、親密な援助、ボランティア活動の5つに分け、それらと障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との相対的関連を検討した。このため、「関係」と「主張」の2尺度(河内, 2003)を用い569名の健常学生に質問紙調査を実施した。2尺度の刺激人物の4障害条件(視覚, 聴覚, 運動, 健常)別に数量化理論I類を適用した。その結果、視覚と聴覚の障害条件では障害者への関心度と障害のある友人との関係が「関係」尺度と、また障害者等への助力的援助が「主張」尺度と関連が強く、関心度や助力的援助頻度が高く、障害のある友だちのいる者は障害学生との交流への抵抗感の弱いことが明らかになった。しかし聴覚障害条件だけに関連のあったボランティア活動では、過去経験者は未経験者よりも抵抗感が強く、負の成果が示唆された。一方、親密な援助は、全てで関連が認められず、抵抗感と障害者との自発的な接触とが単純な関係にないことも明らかとなった。また、「関係」尺度では、刺激人物の障害条件と友人の障害種別との間で、抵抗感の程度に対応関係が認められた。

キーワード：障害学生との交流への抵抗感、障害者への関心度、援助行動、ボランティア活動、友人関係

問 題

昨今わが国でも大学で障害学生が、障害のない学生(以下、健常学生という)と一緒に学ぶケースが増加してきている(全国障害学生支援センター, 2005)。しかし初等中等教育段階で障害学生と交わる機会は少ないため、健常学生の多くは、大学に入学して初めて障害学生と机を並べることになる。このような状況では、大学キャンパス内で健常学生が障害学生と交流しようとしても、健常学生同士ほどにはうまく付き合えないことが推察される(河内, 1990a, 2003; Snyder, Kleck, Strenta, & Mentzer, 1979; Stovall & Sedlacek, 1983)。しかし、障害学生が大学生活を円滑に送るためには、健常学生の支援が不可欠であり(国立大学協会第3常置委員会, 2001)、健常学生との対人関係が障害学生のキャンパスライフの成否を左右すると言っても過言ではない(Gannon & MacLean, 1995)。

しかし、学生の障害条件そのものが健常学生と障害学生との対人関係を阻害する一要因ともなっており(Fichten, Goodrick, Tagalakakis, Amsel, & Libman, 1990; Huure & Aro, 2000; Kef, 1997; Snyder et al., 1979)、両者の

間には心理的バリアが存在すると推察される。この心理的バリアを引き起こす原因は、障害学生の側だけにあるのではない。むしろ、障害学生の周囲にいる健常学生の側にその原因の多くがあるとも言える(Fichten, 1988; Fichten, Robillard, & Sabourin, 1994; Fichten, Robillard, Tagalakakis, & Amsel, 1991)。例えば、健常学生と障害学生との対人関係を困難にしているのは、障害学生と交流する際に不快や抵抗を感じて健常学生が課題をうまく遂行できないと認知することであることが指摘されている(Fichten et al., 1994; 河内, 2003, 2004; 河内・四日市, 1998)。従って、両者の間で良好な対人関係を構築するためには、障害学生との交流に対し健常学生の課題遂行を抑制している抵抗感を軽減させる何らかの方策を立てることが肝要であろう(河内, 2004)。

従来障害者に対する健常者の認知、感情及び行動的意図を決定する要因についてはさまざまなものが探求されてきたが、その中で最も重要な要因の一つとして障害者との接触経験が挙げられている(例えば、Cloerkes, 1979; 松原・堅田・松岡・三沢・中野・大井, 1976; 三沢, 1984)。しかし、障害者と接触したからといって、いつでも交流意欲が肯定的な方向に変化するとは限らない。例えば、障害者との接触経験に関する274編の研究から得られた318の結果を比較検討したところ(Yuker, 1988)、肯定的な効果が得られたのは51%だけで、残り

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科(心身障害学系)
〒305-8572 つくば市天王台1-1-1 筑波大学心身障害学系
kawauchi@human.tsukuba.ac.jp

49%の内10%は否定的な効果が示され、39%は効果なしという結果であった。このような効果の不明確さについては、河内(1990a)が学生の場合には接触の質の違い(すなわち、計画的の有無)が影響していることを明らかにしている。また、障害者との接触経験が否定的な影響を与える場合として、Cloerkes(1979)は自発性に欠け、その場から自主的に回避できないような接触場面を挙げている。この点からみると、統合教育なども児童・生徒が自主的に参加しているとは考えにくいし、彼らの意志でその場から回避することもできず、否定的効果を生じる可能性のあることが推察される。これについては、統合教育経験者207名のうち、統合教育経験を否定的に評価した者が35名(17%)いたことから支持される(青木, 1998)。これに対し、ボランティア活動や友人関係のようにそれらの行為を自らの意志で行い、自らの意志で回避できる場合には、良好な対人関係が構築されるとしている(Cloerkes, 1979)。実際、ボランティア活動に参加した学生はそうでない学生に比べ、障害者に対する態度や自己効力感が前向きであることが見出されている(例えば、黄・大野, 1989; 河内, 1999, 2003, 2004)。同様に、友人関係についても、障害者に対する認知や感情が肯定的になることが報告されている(河内, 1990a; 河内・四日市, 1998; Yuker, 1988)。また、日常生活での援助行動も障害者に対する自主的な行動であるため、障害者への積極性が高まるとされている(福島・野崎, 1986; 河内, 2003)。さらに、障害者に強い関心を示す者は、実際の援助行動に出る者が多いと同時に(河内, 1994)、障害者との交流に抵抗を感じる者が少ないとされている(河内, 1990a, 1990b, 2004; 河内・四日市, 1998)。

ところで、広範囲の文献レビューを行ったCloerkes(1979)は、障害者への態度について決定的な意味を持つのは、障害者と接触するという単なる事実ではなく、接触の質や量であることを論述している。しかし、接触経験の質の違いと効果の大きさとの関連についてはこれまで研究されておらず、接触経験の有無だけに焦点を当てている研究がほとんどであった(例えば、Amsel & Fichten, 1988; Fichten, Bourdon, Amsel, & Fox, 1987; Fichten, Tagalakakis, & Amsel, 1989; 河内, 1999, 2003, 2004; 仲山, 2003)。このような状況の中で、障害者との交流に対する抵抗感を軽減させ、積極性を高める方策を立てるためには、まず接触経験の質と量の有効性を比較検討することが必要であろう(山内, 1992)。ただし、対人場面への影響は障害内容によっても異なることから(Cloerkes, 1979; Stovall & Sedlacek, 1983)、調査票などで

仮定された刺激人物の障害条件の影響についても検討することが重要であろう。さらに、障害内容の影響については、接触経験の対象となる友人が有する障害(以下、友人の障害種別という)とどのような関係にあるかを明らかにすることで、障害のある友人を持つことの意義が示せるであろう。

そこで、本研究ではまず障害者や高齢者など(以下障害者等という)との自主的な接触経験の質に焦点を当て、その効果の違いを解明するため、従来個々に調査されてきた日常生活場面での援助、ボランティア活動、障害のある人との友人関係を取り上げる。さらに、障害者への関心の程度は援助行動と強く結びついているため(河内, 1994)、自主的な援助行動の前段階として、障害者への関心度を加えた。その上で、これら接触経験の質の違いと障害学生との交流での課題遂行に対し健常学生が認知する抵抗感の強さとの関連を明らかにすることを本研究の目的とした。それに加え、友人の障害種別と刺激人物の障害条件とがどのように影響し合っているかを明らかにするため、友人の障害種別と刺激人物の障害条件との対応関係についても検討する。

方 法

1. 調査参加者と実施手続き

本調査参加者は、首都圏にある総合大学において障害学生の在籍する学部で2004年に開かれた心身障害学に関する講義の受講生のうち、調査に自主的に参加した569名の健常学生(男子228名、女子341名)であった。調査参加者のうち、クラスメイトを含め同学年に障害学生のいる学生は425名、いない学生は144名で、分析対象者に障害学生は含めなかった。また、調査は、1回目の授業時間の一部を用いて集合調査を実施した。なお、平均年齢は19歳9ヶ月(標準偏差は1歳10ヶ月)であった。

2. 尺度内容

(1)「抵抗感尺度」人間の行動を規定する心理的要因の1つとして「自己効力感」を挙げることができる(Bandura, 1977)。自己効力感は達成の努力や肯定的な生き方の必要条件になっているが、河内(2003, 2004)は、この認知予期の抑制的な側面に着目し、身体障害学生との交流における健常学生の課題遂行への抵抗感を測定する「障害学生との自己効力感汎用型尺度」を開発した。この尺度は当該分野でわが国唯一のものであるだけでなく、2つの下位尺度からなり、1つは身体障害学生との交流に関し表面的な関係を表す項目(例えば、「喫茶店でコーヒーを一緒に飲まないかとその学生を誘う

場合」,「講義が始まる前にその学生から教室へ一緒に行こうと誘われた場合」)からなる「交友関係」(以下,「関係」という)尺度であり,もう1つは本音の意見を示す項目(例えば,「自分が必要なので授業のノートをその学生に貸すのを断る場合」,「先月貸した1000円をその学生に催促する場合」)からなる「自己主張」(以下,「主張」という)尺度である。また,これら下位尺度項目の中の「その学生」の障害条件は変更可能となっている。ただし,評定尺度が,交流場面で同性の学生と一緒に課題を遂行する場合,「非常に抵抗がある」(1点)から,「全く抵抗がない」(7点)で示す7件法であるため,本研究では本尺度を「抵抗感尺度」とした。

(2) **刺激人物の障害条件** 健常学生にとって理解しやすいのは,外見的に認識できる(可視的)障害条件であるため(河内,2004),本研究では視覚障害(以下,「視覚」という),聴覚障害(以下,「聴覚」という),車椅子使用(以下,「運動」という)の3障害条件を選定した。ただし,各障害条件内でも,その程度や状態は多種多様で,回答者が想起する刺激人物の障害条件が異なるため(Feinman, 1979; 河内, 1993),質問項目の前に,河内(2004)による次のような3障害条件の定義を示した。「視覚障害者」は,目が全く見えないために,歩く時は白杖を,文字の読み書きには点字を使う必要がある人,「聴覚障害者」は,耳が聞こえず,音声でのコミュニケーションが取りにくいと,主に手話や筆談を使う人,「運動障害者」は,手で字を書いたり話したりすることは全く不自由でないが,両足が完全にマヒして歩けないため移動には車椅子を用いる人とした。さらに,これら刺激人物の有する3障害条件に対する統制条件として,障害を有しない「非障害条件(以下,「健常」という)」を本研究では採用した。

3. 接触の質

接触の質としては障害対象の場合と一般対象の場合とした。

(1) **障害対象** 障害者を接触対象とするもの(以下「障害対象」として次の2つを選んだ。1) 障害者への関心度 援助行動の前段階としての障害者への関心の程度を測定するため,河内(2004)が用いた次の1項目評定尺度を使用した。すなわち,「社会には身体にさまざまな障害を持った方がいらっしゃいますが,あなたは次のような障害を有する方々に対しどのくらい関心をお持ちかを教えてください」である。なお,関心対象が有する障害としては,「抵抗感尺度」との対応を考慮し,「健常」を除く上記3障害条件とした。また,評定尺度としては,「非常に関心がある」(1点)から「全

く関心がない」(6点)の6件法とした。2) 友人関係 友人関係は,個人的で,付き合う価値があり,協力的で,親密で,対等な立場の付き合いと見なすことができる。従って,通常援助する者と援助される者という関係とはやや異なる対人関係と考えられる。もちろん,援助行動も理想的には双方向の対等な相手であることが望ましいが,現実には一方向の関係に置かれることが多いと推察される。そこで,本研究では障害者を対等な接触相手と見なすことのできる障害者との友人関係(以下,「友人」という)に焦点を当て,障害のある友人がいるか否かを尋ねた。その結果,「いる者」は273名,「いない者」は296名であった。さらに,「いる者」については,友人の障害種別についても尋ねた(複数回答)。その結果,障害種別を1つあげた者は,視覚障害(以下,「視覚」という)が48名,聴覚障害(以下,「聴覚」という)が97名,言語障害(以下,「言語」という)が0名,運動障害・肢体不自由(以下,「運動」という)が36名,知的障害(以下,「知的」という)が27名,その他の障害(以下,「その他」という)が4名であった。また,障害種別を2つ以上挙げた者(以下,「複数」という)は,61名であった。

(2) **一般対象** 接触対象を障害者に限らないもの(以下「一般対象」として次の2つを選んだ。1) 地域社会における援助行動 日常生活において健常学生が,障害者や高齢者などと自主的に単独で接する機会が多いのは,地域社会での援助場面であるように思われる。そこで,本研究では普段の援助行動を表す項目として「障害者に関する世論調査」(内閣府政府広報室,2002)で長年用いられてきた11項目のうち,直接的接触を表す6項目(すなわち,①席を譲った,②横断歩道や階段で手助けをした,③車椅子を押した,④一緒に遊んだ,⑤家事や買物などの手伝いをした,⑥相談相手,話し相手になった)を採用した。ただし,「入浴や着替えなどの手伝い」については,異性には行いにくいと,本研究からは省いた。これ以外に日常生活での援助経験があるかを本調査参加者とは別の423名の健常学生に尋ね,自由記述させたところ,⑦「道案内(誘導)をした」,⑧「荷物を代わりに持った」という回答が多かった。そこで,この2項目を含めた8項目を「地域社会における援助行動」とした。しかし,内容的にみると,①②⑦⑧の4項目は屋外での一時的で単純な援助であるのに対し,③～⑥の4項目は,かなり親密で,特定の相手が想定される場合の多い援助であると見なすことができる。そこで,上記8項目のうち前者を「一時的援助」(以下,「助力」という),後者を「親密な援助」(以下,「親密」という)として分けた。な

お, 評定尺度は, 「一度もない (1 点)」, 「一度くらい (2 点)」, 「これまでに数回 (3 点)」, 「1 年に数回 (4 点)」, 「毎月 1 回 (5 点)」, 「毎月 1 回以上 (6 点)」の 6 件法とした。2) ボランティア活動 ボランティア活動(以下, 「活動」という) は, 自らの意志で行う援助の中でも, 地域社会の中で一時的かつ単独で行う援助行動とは異なり, 継続的で集団の連帯感を必要とする援助行動と見なすことができる (金子, 1992)。ただし, 「活動」には, さまざまな支援対象が含まれるため, 明確な分類基準を設定することが困難である。そこで, 本研究では支援対象を特定せず, 河内 (2004) の 3 分類に従い, 調査参加者を, 過去にしたことがあるが, 今はしていない (「過去経験」, 263 名), 現在している (「現在経験」, 71 名), これまでに一度もしたことがない (「未経験」, 235 名) に分けた。

結 果

1. 尺度構成の検討

(1) 「抵抗感尺度」 先行研究 (河内, 2003, 2004) においてその信頼性と妥当性が確認されている「抵抗感尺度」ではあるが, 本調査参加者と障害学生との関係が先行研究の参加者のそれとは質的に異なると考えられるため, 本研究でも 18 項目に刺激人物の 4 障害条件 (「健常」を含む) 別の主因子法因子分析を行った。固有値 1 以上の因子はどの障害条件も 2 個だけで, 既存の下位尺度に対応していた。そこで, 各下位尺度 (9 項目) の Cronbach の α 信頼性係数, θ 信頼性係数及び各項目の主成分負荷量を求めた。その結果, 「健常」の「関係」尺度に含まれる 1 項目 (すなわち, 「その学生ではできない調べ物を図書館に行ってくれと頼まれた場合」) の主成分負荷量が, .229 と, 他よりも .200 以上小さかった。そこで, 当該項目を刺激人物の各障害条件の「関係」尺度から除き, 残り 8 項目で同様の分析を行った。その結果, 「関係」尺度の全ての項目の第 1 主成分負荷量が .460 以上となり, また信頼性係数も全て .800 以上となった。他方, 「主張」尺度では刺激人物の 4 障害条件全てで信頼性係数が .800 以上となり, 各項目の主成分負荷量も全て .400 以上で, 満足できる値であった。そこで, 「関係」尺度は, 8 項目の総和を, また「主張」尺度は 9 項目の総和を尺度得点として用いた。

(2) 「関心度得点」 刺激人物の 3 障害条件相互に「障害者への関心項目」によるスピアマンの順位相関係数を求めたところ, 全ての値が .690 以上で, 相互関連が認められた。そこで, これら 3 項目に主成分分析を適用し, 主成分得点を「関心度得点」とし, その大

小により, 調査参加者をグループ分けした。ただし, 同一得点が 133 個算出されたため, 各群の人数がかなり不揃いになったが, 評定段階と同じ 6 群に分割した。その結果, 障害者への関心 (以下, 「関心」という) の強いカテゴリーの順に人数を示すと, 強度 6 は 80 名, 強度 5 は 101 名, 強度 4 は 101 名, 強度 3 は 133 名, 強度 2 は 82 名, 強度 1 は 72 名となった。なお, 刺激人物の 3 障害条件に対する主成分負荷量の値は全て .895 以上であった。

(3) 「地域社会における援助行動」 本研究で設定した 2 種類の援助, すなわち「助力」と「親密」を構成する各 4 項目の内的一貫性を確認するため, これら 4 項目に主因子法因子分析を適用した。その結果, 固有値 1 以上の因子は 1 個だけであった。また, 各尺度の Cronbach の α 信頼性係数及び θ 信頼性係数は, 全て .700 以上, 各項目の主成分負荷量は全て .600 以上で, 4 項目による第 1 主成分寄与率はいずれも 50% を超えていた。そこで, 各 4 項目を 1 つの援助尺度と見なし, それらの主成分得点を尺度得点とした。これら 2 尺度得点による相関係数は .528 で, 中程度の関連は見られるものの, 両者は同質ではないことが明らかとなった。このため, 各尺度得点を個別に扱い, 援助の頻度を検討したが, 頻度 6 のカテゴリーに回答した者はどの援助項目もいなかった。そこで, 有効だった 5 つの評定尺度に合わせて, 尺度得点を 5 つの頻度カテゴリーに分割した。なお, 尺度得点 (主成分得点) に結びがあったため, 各頻度の人数は, 「助力」が, 頻度 1 で 114 名, 頻度 2 で 113 名, 頻度 3 で 116 名, 頻度 4 で 113 名, 頻度 5 で 113 名となった。また, 「親密」では, 頻度 1 が 125 名, 頻度 2 が 111 名, 頻度 3 が 114 名, 頻度 4 が 105 名, 頻度 5 が 114 名となった。

2. 障害学生との交流に対する抵抗感と障害者等との接触の質との関連の検討

障害者等との接触の質の違いが, 障害学生との交流における健常学生の課題遂行への抵抗感とどのような関連にあるかを解明するため, 刺激人物の 4 障害条件 (すなわち, 「視覚」, 「聴覚」, 「運動」, 「健常」) 別に下位尺度の尺度得点を基準変数に, また 5 接触の質 (すなわち, 「関心」, 「友人」, 「助力」, 「親密」, 「活動」) を説明変数にした数量化理論 I 類の結果を TABLE 1 及び 2 に示した。各変数の規定力は, 表中の偏相関係数の値 (.13 以上) により評価した。

(1) 「関係」尺度 まず TABLE 1 の偏相関係数の値をみると, 「障害対象」の場合, 「関心」と「友人」では「健常」を除く 3 障害条件で基準を満たしていた。

TABLE 1 「交友関係」尺度における4障害条件と5接触方法に対する数量化理論Ⅰ類の結果

説明変数		基 準 変 数			
〔対象〕		「視覚」	「聴覚」	「運動」	「健常」
〔障害対象〕					
<関心>		(.224)	(.175)	(.209)	(.118)
	強度1	-1.118	-1.938	-0.532	-0.835
	強度2	-2.511	-1.051	-2.326	-0.941
	強度3	0.256	-0.168	0.604	-0.343
	強度4	-1.423	-1.229	-1.489	0.218
	強度5	0.852	1.085	-0.016	0.505
	強度6	3.876	3.283	3.758	1.373
<友人>		(.198)	(.235)	(.132)	(.075)
	いる者	1.831	2.361	1.246	0.509
	いない者	-1.689	-2.178	-1.149	-0.470
〔一般対象〕					
<助力>		(.151)	(.150)	(.175)	(.140)
	頻度1	-2.135	-2.451	-2.623	-1.483
	頻度2	-0.744	-0.435	-0.738	-0.451
	頻度3	0.064	0.634	0.118	0.403
	頻度4	0.981	0.304	1.828	1.167
	頻度5	1.852	1.953	1.435	0.366
<親密>		(.073)	(.088)	(.102)	(.065)
	頻度1	-1.085	-0.940	-0.957	-0.623
	頻度2	-0.367	-1.067	-1.084	0.345
	頻度3	0.275	0.823	0.701	0.480
	頻度4	0.806	0.885	0.023	0.023
	頻度5	0.530	0.430	1.382	-0.154
<活動>		(.079)	(.130)	(.063)	(.060)
	過去経験	-0.702	-1.246	-0.506	-0.145
	現在経験	0.802	1.475	1.012	1.012
	未経験	0.543	0.949	0.261	-0.143
重相関係数		.433	.435	.409	.280

注) () 内は偏相関係数を示す

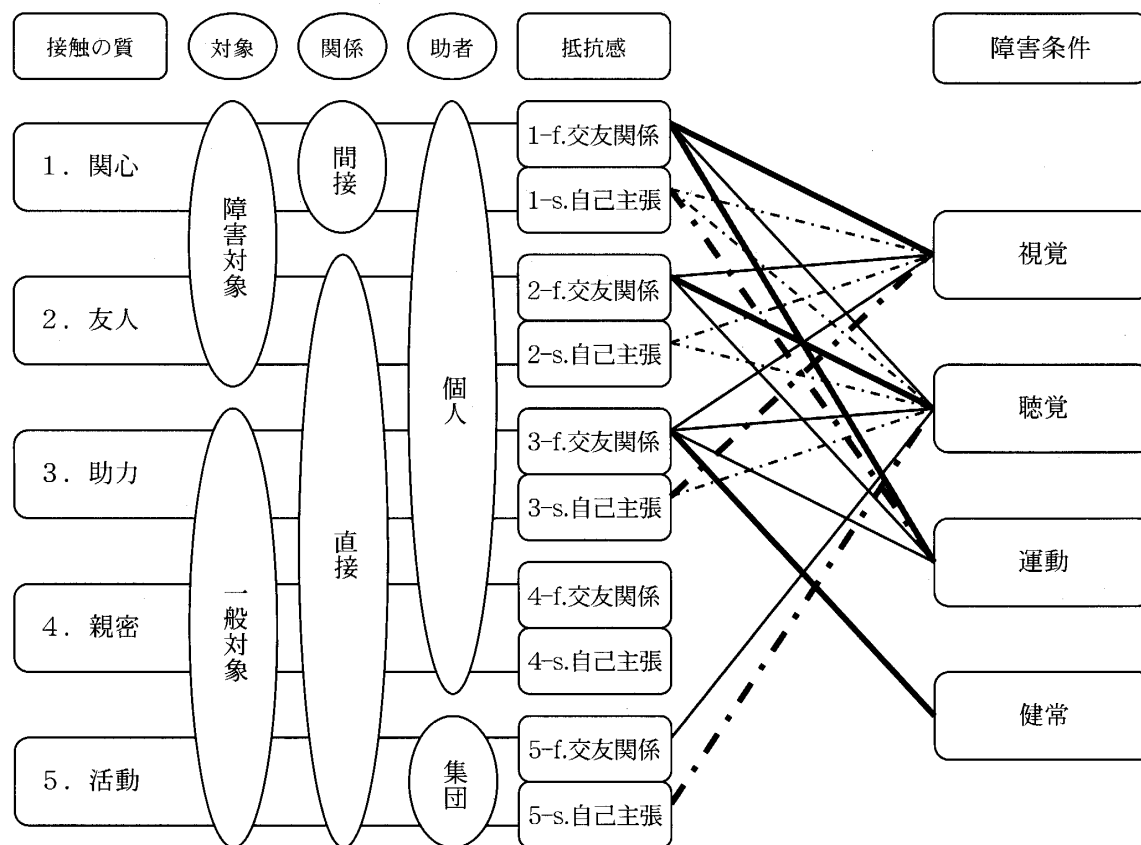
これに対し、「一般対象」の場合は、「助力」が、4障害条件全てで条件を満たしているのに対し、「親密」は逆に4障害条件全てで基準を満たしていなかった。また、「活動」は「聴覚」でしか基準を満たしていなかった。これらの関係をFIGURE 1に示したが、偏相関係数の大きい順に説明変数を並べると、「視覚」では「関心」>「友人」>「助力」、 「聴覚」では「友人」>「関心」>「助力」>「活動」、 「運動」では「関心」>「助力」>「友人」、 「健常」では「助力」のみとなった。

次に、カテゴリー数量の大きさと正負の符号に基づいて、関連の認められた説明変数の関係をみると、3障害条件共通に、「関心」では強度6がプラスの大きな値を、強度1、2、4がマイナスを示し、「友人」では、「いる者」がプラス、「いない者」がマイナスとなった。一方、「助力」では、全ての障害条件で頻度3～5はプラス、頻度1と2はマイナスであり、頻度と寄与率の関係はほぼ正比例していた。また、「活動」では、

「過去経験」がマイナスで、「現在経験」と「未経験」がプラスであったが、「現在経験」は、「未経験」よりも寄与率が大きかった。

(2) 「主張」尺度 TABLE 2の各偏相関係数の値によると、「健常」はどの説明変数とも関連が認められなかった。これに対し、3障害条件では、「障害対象」の場合、「関心」が3障害条件全てで基準を満たしていたが、「友人」は「聴覚」でしか基準を満たしていなかった。「一般対象」の場合は、「助力」が、「視覚」と「聴覚」で、「活動」が「聴覚」で基準を満たしていた。しかし、「親密」はどの障害条件とも関連が認められなかった。これらの関係をFIGURE 1に示したが、偏相関係数の大小で説明変数を並べてみると、「視覚」では「助力」>「関心」、 「聴覚」では「活動」>「助力」>「関心」>「友人」、 「運動」では「関心」となっていた。

次に、関連の認められた説明変数についてカテゴリー数量の大きさと正負の符号の方向をみると、「関



実線は「関係」尺度により、点線は「主張」尺度による。
太線は各障害条件の中で基準を満たした偏相関係数のうち値が最も大きかったもの。

FIGURE 1 接触経験の質と交流に対する抵抗感との関連図（基準を満たした偏相関係数による）

心」では3障害条件とも同じなのは、強度6に加え強度1がプラスで大きな値を示し、強度2～4がマイナスとなっていた。「友人」では「聴覚」で「いる者」がプラス、「いない者」がマイナスであった。一方、「助力」では「視覚」と「聴覚」とがプラスなのは頻度2と頻度5で、マイナスなのは頻度1, 3, 4であったが、大きな値は両障害条件とも頻度1と5であった。「活動」では「過去経験」がマイナス、「現在経験」と「未経験」がプラスで、「現在経験」の値が大きくなっていた。

3. 刺激人物の障害条件と友人の障害種別との関係の検討

刺激人物の障害条件に対する回答に障害のある友人の有する障害種別がどのように影響するかを検討するため、障害のある友人がいる参加者を分析対象に、各下位尺度別に刺激人物の4「障害条件」×友人の5「障害種別」（すなわち、『視覚』、『聴覚』、『運動』、『知的』、『複数』）ごとの平均値を求めて示したのがTABLE 3及び4である。なお、友人の障害種別のうち『言語』と『その

他』とは人数が0名と4名と非常に少なかったため、本分析から省いた。また、障害種別のカテゴリーの人数が不揃いであるため、調和平均を求めた上で、下位尺度別に『友人の障害種別』×「刺激人物の障害条件」による混合型二元配置分散分析を行った（田中・山際, 1992）。自由度は、刺激人物の障害条件が3、友人の障害種別が4で、有意な場合はLSDによる多重比較を行った。なお、平均値の大きい方が抵抗感の弱いことを示しているが、以下では二者間の抵抗感の強さに着目し、前者が後者よりも有意に抵抗感が弱い（尺度得点が高い）場合にく、有意でない場合に＝という記号を付した。ただし、[]で囲んだ場合は、カッコ内は相互に＝となる。

(1) 「関係」尺度 交互作用が有意であったため($F=3.4, p<.01$), 各変数ごとにF値を求めたところ、友人の障害種別では『視覚』($F=14.3$), 『聴覚』($F=21.9$), 『運動』($F=24.4$), 『知的』($F=34.6$), 『複数』($F=10.8$)の全てが1%水準で有意であった。多重比較の結果によると、どの障害種別でも、交流への抵抗感が最も弱い

TABLE 2 「自己主張」尺度における4障害条件と5接触方法に対する数量化理論Ⅰ類の結果

説明変数		基 準 変 数			
〔対象〕					
<接触の質>	カテゴリー	「視覚」	「聴覚」	「運動」	「健常」
〔障害対象〕					
<関心>		(.162)	(.133)	(.139)	(.125)
	強度1	2.455	1.167	1.542	1.551
	強度2	-1.650	-0.213	-0.619	-0.268
	強度3	-0.736	-0.489	-0.645	-1.671
	強度4	-1.647	-2.184	-1.895	-1.012
	強度5	0.314	0.218	-0.185	0.310
	強度6	2.388	2.464	2.944	2.544
<友人>		(.108)	(.132)	(.094)	(.069)
	いる者	1.126	1.468	1.103	0.831
	いない者	-1.038	-1.354	-1.018	-0.767
〔一般対象〕					
<助力>		(.163)	(.135)	(.124)	(.116)
	頻度1	-1.921	-1.891	-2.034	-1.894
	頻度2	0.286	0.125	0.749	1.081
	頻度3	-1.286	-0.611	-1.112	-1.245
	頻度4	-0.056	-0.270	0.321	0.311
	頻度5	3.027	2.680	2.124	1.796
<親密>		(.099)	(.053)	(.047)	(.023)
	頻度1	-0.603	0.067	-0.546	-0.204
	頻度2	-0.004	-0.678	-0.067	-0.109
	頻度3	-1.498	-0.573	-0.213	-0.300
	頻度4	0.935	0.231	-0.203	0.200
	頻度5	1.301	0.948	1.064	0.446
<活動>		(.095)	(.158)	(.097)	(.088)
	過去経験	-0.946	-1.491	-0.939	-0.925
	現在経験	1.493	3.604	2.289	2.046
	未経験	0.608	0.580	0.359	0.418
重相関係数		.347	.346	.295	.250

注) () 内は偏相関係数を示す

TABLE 3 「交友関係」尺度における障害条件×障害種類の平均値

障害種別	障害条件			
	「視覚」	「聴覚」	「運動」	「健常」
『視覚』	47.5	43.9	46.4	50.5
『聴覚』	43.6	45.8	45.0	51.3
『運動』	44.1	43.1	47.3	51.0
『知的』	40.0	39.0	42.7	48.4
『複数』	46.9	46.7	49.0	51.8

TABLE 4 「自己主張」尺度における障害条件×障害種類の平均値

障害種別	障害条件			
	「視覚」	「聴覚」	「運動」	「健常」
『視覚』	40.0	39.0	42.2	44.1
『聴覚』	38.3	41.1	41.8	44.0
『運動』	39.4	39.8	41.7	45.4
『知的』	33.4	32.9	37.6	39.7
『複数』	42.5	44.2	45.9	48.0

は「健常」であった。また、残りの3障害条件についてみると、『視覚』では[「視覚」・「運動」]<「聴覚」であった。『聴覚』では、「聴覚」=「運動」,「運動」=「視覚」で、「聴覚」<「視覚」であった。また、『運動』,『知的』,『複数』はいずれも、「運動」<[「視覚」・「聴覚」]であった。

一方、刺激人物の障害条件では、「視覚」($F=5.9$),「聴

覚」($F=5.1$),「運動」($F=3.9$),「健常」($F=2.3$)で、「健常」を除く3障害条件が1%水準で有意であった。そこで、これら3障害条件について多重比較を行った結果をみると、「視覚」では『視覚』=『複数』,『複数』=『運動』・『聴覚』,『視覚』<[『運動』・『聴覚』]で、『知的』は他のどの障害種別よりも抵抗感が大きかった。「聴覚」では[『複数』・『聴覚』・『視覚』・『運動』]<

『知的』であった。「運動」では、『複数』・『運動』・『視覚』=『聴覚』、『聴覚』=『知的』で、『複数』<『聴覚』及び『複数』・『運動』・『視覚』<『知的』であった。

(2) 「自己主張」尺度 友人の障害種別 ($F=4.7$) 及び刺激人物の障害条件 ($F=61.7$) とも 1%水準で有意であり、交互作用 ($F=1.5$) は有意でなかった。友人の障害種別の多重比較によると、『複数』、『運動』、『視覚』、『聴覚』<『知的』であった。また、刺激人物の障害条件の多重比較では、「健常」<「運動」<「聴覚」・「視覚」であった。

考 察

1. 「抵抗感尺度」の心理統計的特性について

本調査における「抵抗感尺度」の尺度項目については、刺激人物の「健常」を除く 3 障害条件で、全ての下位尺度が先行研究 (河内, 2003, 2004) の結果と一致していた。従って、刺激人物が障害学生の場合には因子的妥当性に問題のないことが示された。しかし、「健常」では「関係」尺度で 1 項目の因子負荷量に低い値が見出され、河内 (2003) の結果とは一致しなかった一方、「主張」尺度は、河内 (2003) の結果と同様に、心理統計的に満足すべき値を示していた。これら 2 尺度の尺度得点には有意な差異が認められており (仲山, 2003)、本研究でも刺激人物のすべての障害条件で「関係」尺度の方が「主張」尺度よりも、尺度得点が有意に大きく (抵抗感が弱く) なっていた。また、「健常」は他の障害条件に比べ両下位尺度得点が高いことから、健常学生同士の表面的な交流では特に抵抗感が弱くなり、抵抗を感じる交流の範囲が不明確になったと推察される。この点については今後より詳細な検討が必要であろう。なお、因子負荷量の低い項目を除いた 8 項目による「関係」尺度の心理統計的特性は、刺激人物の 4 障害条件全てで満足できる値が得られており、基本的には従来の因子構造に問題のないことが示されたと言える。

2. 障害学生との交流に対する抵抗感と障害者等との接触の質との関連について

本研究では、障害学生との交流における健常学生の課題遂行への抵抗感と 5 つの異なる接触の質がどのような関連にあるかを、数量化理論 I 類を用いて検討した。FIGURE 1 から分かるように、「視覚」と「聴覚」の障害条件でみると、「関係」尺度は、「障害対象」と関連が強く、「主張」尺度は、「一般対象」と関連が強かった。この関連の違いは、交流対象との関係が対等であ

るか否かということと何らかの関係があると推察されるが、この点については今後詳細な検討が必要であろう。

(1) 「障害対象」について まず「関心」の変数についてみると、「関係」尺度では、刺激人物の「健常」を除く 3 障害条件で関連が認められた。これと類似の結果は先行研究でも見出されている (河内, 2004; 河内・四日市, 1998)。特に、障害者への関心が強い者は、障害学生との交流に対する抵抗感の程度が弱いだけでなく、「視覚」と「運動」では説明変数の中で最も関連が強くなっていた。また「聴覚」でも 2 番目に関連が強く、障害者への関心を高めることは、障害学生との表面的な交流に対し抵抗感を軽減させるのに有効な方策であることが明らかとなった。同様に、「主張」尺度でも、刺激人物の「健常」を除く 3 障害条件で関連が認められたが、このような関係は先行研究では見出されていない (河内, 2004; 河内・四日市, 1998)。この理由としては、先行研究とは異なり、本調査では障害学生を同学年・同学科あるいはクラスメイトにもつ参加者が多かったことが考えられる。つまり障害のある学生が周囲にいることが、障害者への関心への具体性を増し、その結果、本音の付き合いにおいても抵抗感を弱める方向に寄与したと推察される。ただし、「主張」尺度においても値は小さいが、「関係」尺度と同様に、「視覚」と「運動」で関連が最も強く、「健常」の条件とは関連が弱いなど、障害者に関心を向けさせることの有効性が本音の付き合いにおいても示唆されたと言えるであろう。次に、「友人」の変数についてみると、「関係」尺度では刺激人物の「健常」を除く 3 障害条件で関連が認められ、「聴覚」では説明変数の中で最も関連が強くなっていた。従って、障害者を友人に持つことが、障害学生との表面的な交流に対する抵抗感を軽減させるのに有効であることは明らかであろう。この理由としては、障害のある仲間と社会的な関係を持つことで、健常学生が他者への耐性を強めたり、人の差異に後込みをしなくなったりという精神面で成長することが挙げられるであろう (Peck, Donaldson, & Pezzoli, 1990)。また、「主張」尺度では「聴覚」に関連が認められたが、これは、聴覚障害が調査参加者の周囲にいる友人の障害種別の中では人数が最も多かったことが影響したと推察される。

(2) 「一般対象」について 地域社会における援助行動の中の「助力」の変数についてみると、「関係」尺度では、刺激人物の 4 障害条件全てと関連が認められた。刺激人物の障害条件とは関係なく援助行動の影響が認

められたことは、河内 (2003) の結果とも一致している。これは、この変数の援助対象が、障害者だけでなく、高齢者など町中で困っている人が含まれているためと考えられる。このことは、町中での一時的援助の頻度の増加が、刺激人物の障害条件とは関係なく、他者との交流に対する抵抗感の軽減に結びついたことから支持されるであろう。このように、一時的な援助行動が将来の援助意欲と結びつくことは、中学生を対象とした調査研究でも見出されている (福島・野崎, 1986)。一方、「主張」尺度では「視覚」と「聴覚」だけに関連が認められた。これに対し、先行研究で関連が認められたのは「聴覚」と「健常」で、「視覚」には援助行動の影響は認められなかった (河内, 2003)。この理由としては、先行研究のほとんどが援助経験の有無だけを尋ねているのに対し、本研究では具体的な内容に言及したためと考えられる。特に、「助力」の変数の内容は、視覚障害者と関係するものが多く (総理府, 1985)、このことが「視覚」との関連に関与したと推察される。また、「聴覚」で関連が認められたのは、聴覚障害と視覚障害とはイメージが類似していると同時に (河内, 2001)、運動障害に比べ、本音の付き合いに対しても抵抗感が強いなど (河内, 2004)、これら2障害は健常学生の認知傾向が類似しているためと推測される。しかし、頻度のカテゴリーの両極をみると、刺激人物の3障害条件とも寄与の方向は一致しており、実質的な差異はないとも言える。従って、障害学生との交流に対する抵抗感を軽減させるのには、障害の有無には関わりなく、町中での一時的な援助を体験させることが有効な手段になるであろう。これに対し、「親密」の変数は、「関係」及び「主張」の両尺度で、刺激人物の4障害条件全てと関連が認められなかった。この理由としては、「助力」の変数とは異なり、この変数の援助対象が、不特定の者ではなく、特定の個人になる可能性も強く、「抵抗感尺度」で測定しているような、ある個人を特定しない一般的な抵抗感とは結びつかなかったと考えられる。従って、障害学生との交流に対する一般的な抵抗感を軽減させるための入門的なカリキュラムを作成する際には、健常学生にとって参加しやすい一時的な援助体験学習を実践させることが有効であろう。次に、「活動」の変数と関連が認められたのは、「関係」及び「主張」の両尺度とも「聴覚」だけであった。これは、「視覚」でもボランティア活動の影響が見出されたという先行研究 (河内, 1999) とは異なる結果である。また、ボランティア活動の影響も先行研究では「関係」尺度の方が大きく (河内, 1999)、下位尺度との

関連についても先行研究とは違いのあることが示された。一方、ボランティア活動の経験内容では、先行研究 (河内, 2004) と同様に、両尺度とも「現在経験」は本研究でも抵抗感を軽減するプラスの方向に寄与しているが、本研究ではマイナスの方向に寄与するのが「未経験」ではなく、「過去経験」となっていた。これは、従来指摘されてきたボランティア活動の効果は、本研究では現在経験者にしかみられず、活動を継続できなかった者の場合は、未経験者よりも抵抗感が強いなど、負の成果を示唆するものと言える。従って、今後は自主的な接触でも負の成果に留意すべきであろう (浦, 2000)。特に、ボランティア活動などの援助体験で負の成果を生じた学生に対しては相談プログラムを準備することも重要となるであろう。一方、「聴覚」でなぜこのような負の援助成果が生じたかについて明確な解釈を与えることはできない。ただ、本調査参加者の多くがクラスメイトなどとして聴覚障害学生の学業支援と関係を持つ可能性を示していることを考えると、このことが何らかの影響を及ぼしたと考えられる。例えば、聴覚障害学生の学業支援では、ノートテイクのような講義保障を複数の健常学生で行うのが主であるため、相互に納得のできる協力が得られないと、相手から心理的反発を生み (菅沼・浦, 1997)、それが障害学生への抵抗感に結びついたとも考えられる。いずれにしても、ボランティア活動がいつでも正の援助成果を生むとは限らないことには留意すべきであろう (浦, 2000; Yucker, 1988)。従って、ボランティアとしてどのような関わり方が、障害学生と健常学生のキャンパスライフを豊かにし、支援を介しての良好な人間関係の構築に寄与するのかを、障害学生と健常学生の双方の視点で検討していくことが今後必要であろう。

3. 友人の障害種別と刺激人物の障害条件との関係について

前項で指摘した友人の障害種別が刺激人物の障害条件にどのような影響を及ぼすかを検討するため、二元配置分散分析を適用した。その結果、「関係」、「主張」の両尺度とも、友人の障害種別とは関係なく、刺激人物の4障害条件共通に「健常」が最も抵抗感が弱かった。この理由としては、健常学生に比べ、障害学生との交流は、健常学生にとっては不快感が強く気楽でいられず、否定的な考えが浮かぶためと考えられる (Fichten & Amsel, 1988; Fichten, Robillard, Judd, & Amsel, 1989; Fichten et al., 1991; Fichten, Tagalakakis, & Amsel, 1989)。一方、「関係」尺度の残り3障害条件で、抵抗感の強さを友人の障害種別ごとにみると、『視覚』では「視覚」

が、『聴覚』では「聴覚」が、そして残り3障害種別では「運動」が最低で、対応する障害の影響が示された。他方、友人の障害種別について、抵抗感の強さを刺激人物の障害条件ごとにみると、『知的』がどの障害条件でも最高で、最も弱いのは「視覚」は『視覚』が、そして「聴覚」と「運動」は『複数』となっていた。ただし、「聴覚」も「運動」も2番目に弱いのは『聴覚』と『運動』であり、対応関係が示唆された。このことは、一般的には感覚障害の方が運動障害よりも抵抗感が強いとしても(河内, 2004), 友人となれば, そのような抵抗感が解消されることから, 感覚障害学生にとっては意味のある結果であろう。

次に, 「主張」尺度をみると, 刺激人物の4障害条件の傾向は同様で, 最も抵抗感の弱いのが『複数』で, 最も強いのが『知的』であった。この関係は「関係」尺度でもほぼ類似しており, 身体障害と知的障害の影響の仕方には違いのあることが推察される。一方, 刺激人物の障害条件では, 友人の障害種別とは関係なく, 「健常」, 「運動」, 「聴覚」, 「視覚」という順で抵抗感が強く, 先行研究の結果ともほぼ一致している(河内, 2003, 2004)。

以上, 本研究では障害学生との交流における健常学生の課題遂行への抵抗感に関しては, 障害者等との自主的な接触の質の違いが大きな役割を果たしていることを明らかにした。しかし, ある接触の質と抵抗感とに関連があったとしても, その接触の質が直接抵抗感を軽減したと断定することはできないであろう。つまり, 抵抗感が弱いために, 接触, あるいは援助行動に出たとも考えられるからである。むしろそのような見方の方が一般的とも言えるであろう。従って, 今後は障害者等との交流に関し接触の質と健常学生の課題遂行への抵抗感との因果関係に焦点を当てた研究が必要となるであろう。

引用文献

- Amsel, R., & Fichten, C. S. 1988 Effects of contact on thoughts about interaction with students who have a physical disability. *Journal of Rehabilitation*, **54**, 61-65.
- 青木邦子 1998 統合教育と偏見 I 東京女子大学紀要論集, **48**(2), 169-189, 195. (Aoki, K. 1998 Integrated education system and the prejudice toward handicapped persons. *Essays and Studies : Science Reports of Tokyo Woman's Christian University*, **48**(2), 169-189, 195.)
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Cloerkes, G. 1979 *Einstellung und Verhalten gegenüber Körperbehinderten : Eine Bestandsaufnahme der Ergebnisse internationaler Forschung*. Berlin : Marhold.
- Feinman, S. 1979 Do sighted people respond to different levels of visual loss ? *Journal of Visual Impairment and Blindness*, **73**, 185-190.
- Fichten, C. S. 1988 Students with physical disabilities in higher education : Attitudes and beliefs that affect integration. In H.E. Yuker (Ed.), *Attitudes toward persons with disabilities*. New York : Springer. Pp.171-186.
- Fichten, C. S., & Amsel, R. 1988 Thoughts concerning interaction between college students who have a physical disability and their nondisabled peers. *Rehabilitation Counseling Bulletin*, **32**, 22-40.
- Fichten, C. S., Bourdon, C. V., Amsel, R., & Fox, L. 1987 Validation of the College Interaction Self-Efficacy Questionnaire : Students with and without disabilities. *Journal of College Student Personnel*, **28**, 449-458.
- Fichten, C. S., Goodrick, G., Tagalakakis, V., Amsel, R., & Libman, E. 1990 Getting along in college : Recommendations for college students with disabilities and their professors. *Rehabilitation Counseling Bulletin*, **34**, 103-125.
- Fichten, C. S., Robillard, K., Judd, D., & Amsel, R. 1989 College students with physical disabilities : Myths and realities. *Rehabilitation Psychology*, **34**, 243-257.
- Fichten, C. S., Robillard, K., & Sabourin, S. 1994 The attentional mechanisms model of interaction strain. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, **6**, 239-254.
- Fichten, C. S., Robillard, K., Tagalakakis, V., & Amsel, R. 1991 Casual interaction between college students with various disabilities and their nondisabled peers : The internal dialogue. *Rehabilitation Psychology*, **36**, 3-20.
- Fichten, C. S., Tagalakakis, V., & Amsel, R. 1989 Effects of cognitive modeling, affect, and con-

- tact on attitudes, thoughts, and feelings toward college students with physical disabilities. *Journal of the Multihandicapped Person*, **2**, 119-137.
- 福島佳子・野崎千鶴子 1986 心身障害児（者）に対する中学生の意識 横浜国立大学教育紀要, **26**, 205-223. (Fukushima, Y., & Nozaki, C. 1986 Attitudes of junior high school students toward exceptional children. *The Educational Sciences, Journal of the Yokohama National University*, **26**, 205-223.)
- Gannon, P. M., & MacLean, D. 1995 Australian university students' attitudes towards disability: The first step to integrating students with a disability at university. *Australian Disability Review*, **1**, 63-71.
- 黄 誠遠・大野博之 1989 ボランティア活動参加が健常者の障害児・者に対する意識・態度に及ぼす影響 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, **34**, 241-253. (Huang, C. Y., & Ohno, H. 1989 The effect of participating in volunteer activities to attitudes of normal students toward the handicapped. *Research Bulletin (The Educational Psychology Section), Faculty of Education, Kyushu University*, **34**, 241-253.)
- Huure, T., & Aro, H. 2000 The psychosocial well-being of Finnish adolescents with visual impairments versus those with chronic conditions and those with no disabilities. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, **94**, 625-637.
- 金子郁容 1992 ボランティア—もう1つの情報社会— 岩波書店
- 河内清彦 1990 a 学生および教師の視覚障害者観 文化書房博文社 (Kawauchi, K. 1990a *Attitudes of students and teachers toward persons with visual impairments*. Bunka Shobo Hakubunsha.)
- 河内清彦 1990 b 肢体不自由者（児）に対する大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科および性別の役割について 特殊教育学研究, **28**(3), 25-35. (Kawauchi, K. 1990 b The structure of college students' attitudes toward people with physical disabilities. *Japanese Journal of Special Education*, **28**(3), 25-35.)
- 河内清彦 1993 視覚に障害のある児童に対する小学校高学年児童のイメージ 特殊教育学研究, **31**(3), 17-26. (Kawauchi, K. 1993 Sixth graders' images of ten types of children with and without visual impairments. *Japanese Journal of Special Education*, **31**(3), 17-26.)
- 河内清彦 1994 視覚に障害のある人々を取り巻く現代の社会・心理的環境 谷村裕教授退官記念論文集刊行会（編） 視覚障害に学ぶ 谷村裕教授退官記念論文集 谷村裕教授退官記念論文集刊行会 Pp.65-73.
- 河内清彦 1999 視覚障害学生を交流対象とした「キャンパス内交流自己効力尺度（CISES）」の作成 教育心理学研究, **47**, 471-479. (Kawauchi, K. 1999 Construction of the Campus Interaction Self-Efficacy Scale (CISES) for students with visual impairments. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 471-479.)
- 河内清彦 2001 視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造—性及び専攻学科との関連— 教育心理学研究, **49**, 81-90. (Kawauchi, K. 2001 College students' meaning structure of images of blind students and deaf students: Gender and major fields. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 81-90.)
- 河内清彦 2003 「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度」の妥当性の検討—聴覚障害および視覚障害条件の影響について— 特殊教育学研究, **40**, 451-461. (Kawauchi, K. 2003 Validity and reliability of the General-Purpose Scale of Self-Efficacy Beliefs: Interactions with students with hearing impairments or visual impairments. *Japanese Journal of Special Education*, **40**, 451-461.)
- 河内清彦 2004 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響 教育心理学研究, **52**, 437-447. (Kawauchi, K. 2004 University students' self-efficacy expectations and attitudes toward interactions with peers with disabilities: Influence of disabling condition, interpersonal situation, and personal characteristics. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **52**, 437-447.)
- 河内清彦・四日市章 1998 感覚障害学生とのキャン

- パス内交流に対する健常学生の自己効力に関する研究 教育心理学研究, **46**, 106-114. (Kawauchi, K., & Yokkaichi, A. 1998 The self-efficacy expectations of non-disabled students about interactions with students with sensory impairments in college context. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 106-114.)
- Kef, S. 1997 The personal networks and social supports of blind and visually impaired adolescents. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, **91**, 236-244.
- 国立大学協会第3常置委員会 2001 国立大学における身体に障害を有する者への支援等に関する実態調査報告書 国立大学協会事務局
- 松原達哉・堅田明義・松岡 武・三沢義一・中野善達・大井清吉 1976 特殊教育専攻学生の意識調査 特殊教育学研究, **14**, 22-38. (Matsubara, T., Katada, A., Matsuoka, T., Misawa, G., Nakano, Y., & Oi, S. 1976 A survey study of college students majoring in special education. *Japanese Journal of Special Education*, **14**, 22-38.)
- 三沢義一 1984 障害者の教育と心理 光生館
- 内閣府政府広報室 2002 障害者 月刊世論調査, **34**(5), 91-149.
- 仲山佳秀 2003 身体障害学生との大学内交流における社会福祉専攻学生の自己効力予期 人間の福祉: 立正大学社会福祉学部紀要, **13**, 71-78. (Nakayama, Y. 2003 The self-efficiency expectation of non-handicapped students majoring in social welfare concerning interaction with physically handicapped students on campus. *Human Well-Being : Journal of the Faculty of Social Welfare*, Risho University, **13**, 71-78.)
- Peck, C. A., Donaldson, J., & Pezzoli, M. 1990 Some benefits nonhandicapped adolescents perceive for themselves from their social relationships with peers who have severe handicaps. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, **15**, 241-249.
- Snyder, M. L., Kleck, R. E., Strenta, A., & Mentzer, S. J. 1979 Avoidance of the handicapped: An attributional ambiguity analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 2297-2306.
- 総理府障害者対策推進本部担当室 1985 障害者の外出・移動における意識調査報告書 大蔵省印刷局
- Stovall, C., & Sedlacek, W. E. 1983 Attitudes of male and female university students toward students with different physical disabilities. *Journal of College Student Personnel*, **24**, 325-330.
- 菅沼 崇・浦 光博 1997 道具的行動と社会情緒的行動がストレス反応と課題遂行に及ぼす効果—リーダーシップとソーシャル・サポートの統合的アプローチ— 実験社会心理学研究, **37**, 138-149. (Suganuma, T., & Ura, M. 1997 The effects of instrumental and socio-emotional behavior on stress reactions and task performance: An integrative approach to leadership and social support. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 138-149.)
- 田中 敏・山際勇一郎 1992 ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法—方法の理解から論文の書き方まで— 教育出版
- 浦 光博 2000 対人関係の光と影 西川正之(編) 援助とサポートの社会心理学—助けあう人間のころと行動— 北大路書房 Pp.118-129.
- 山内隆久 1992 障害者に対する態度変容の研究の展望—対人接触の効果を中心として— 北九州大学文学部紀要 (B系列), **24**, 63-84. (Yamauchi, T. 1992 A Review: Effects of interpersonal contacts on attitude change toward the handicapped. *Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University (Series B)*, **24**, 63-84.)
- Yuker, H. E. 1988 The effects of contact on attitudes toward disabled persons: Some empirical generalizations. In H.E. Yuker (Ed.) *Attitudes toward persons with disabilities*. New York: Springer. Pp. 262-275.
- 全国障害学生支援センター 2005 大学案内 2005 障害者版 全国障害学生支援センター

付 記

本論文の英文抄録をご校閲いただきました早川真一氏に深く感謝いたします。

本研究は独立行政法人日本学術振興会の平成16年度の科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)課題番号15530616)を受けて行われた。

(2005.3.11 受稿, '06.5.16 受理)

Type of Contact With People With and Without Disabilities and the Reluctance of College Students Without Disabilities to Interact With Peers With Disabilities

KIYOHICO KAWAUCHI (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, INSTITUTE OF DISABILITY SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2006, 54, 509—521

The present study investigated the relationship between the reluctance of college students without disabilities to interact with peers with disabilities and their history of contact with people with and without disabilities. Contact was classified into 5 types : friendship, transient help, personal help, volunteer activities, and interest in persons with disabilities. College students without disabilities ($N=569$) answered a questionnaire based on Friendship and Self-Assertiveness subscales that asked about 3 disabling conditions : blindness, deafness, and use of a wheelchair, plus non-disability. The results obtained using quantification theory I indicated that, with respect to contact with people who were blind or deaf, the students who had friends with disabilities and were interested in persons with disabilities showed less reluctance on the Friendship subscale, whereas those willing to give transient help showed less reluctance on the Self-Assertiveness subscale. However, with respect to volunteer activities for people who are deaf, the students who had quit such activities showed more reluctance on both subscales. Finally, a relation was found on the Friendship subscales between the types of disabilities the participants' friends had and the participants' lack of reluctance to interact with peers who had those particular conditions.

Key Words : reluctance to interact with peers with disabilities, interest in people with disabilities, helping behavior, volunteer activities, college students